
転生NEXT

虹鮫連牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生NEXT

【Nコード】

N6798Y

【作者名】

虹鮫連牙

【あらすじ】

真つ暗な世界から神様の導きでやって来た場所は、テレビアニメ『魔法少女リリカルなのは』の世界。転生者となった男は、原作に介入して悲しい運命に立ち向かう。「俺の名前は、碎城院聖刃だ！ 合言葉は、絶対原作介入主義！」この作品は、Arcadiaにも投稿しています。

NEXT 1：転生者、誕生

悲しい運命なんてまっぴらごめんだ。

お前の考えた生き方なんて。

お前の作りだした道なんて。

お前の決めた運命だなんて。

俺は絶対に認めない。

そうだ、運命ってやつは自分自身の手で切り開いていくものなんだ。だって皆もそう言っているじゃないか。

幸せになる権利は誰もが持っているものだ。

でも、不幸になる義務は誰にもない。

だから、“俺はここにいる”。

「俺は……………」

意識が覚醒した瞬間に解ったことは、俺に形が無いということだった。

今俺がいる場所、というよりも俺の意識が存在する場所は、端から端まで真っ黒な場所。上下が分からないとか、どこまでも広がっているとか、そういう三次元的感覚さえも感じられない。

見渡せないし、澄ます耳も探る手足も無い。呼吸することさえも忘れてしまっているかのよう。

だから俺は、自分に形が無いのだと思った。

「俺は、何？」

「あのお……………聞いていただけますか？」

「はい？」

突然の声。耳なんて無いはずなのに、確かに聞こえた。

そう思っていたら、無いはずの目で見てみたいに、声の主がそこにいた。

「こんにちは」

「うおおっ！ いつの間にいー!？」

無造作に波打つ金色の天然パーマを右手で掻きながら、頬を赤らめた少年がそこにいた。真っ黒な世界なのに不自然なほどはつきりと見える素肌は色白。身に纏う衣服だって本当の意味での純白だ。まあ、衣服と言っても一枚布をすっぽりと被っているだけのような簡素なものだけだ。

「驚かせてすみません」

「え、ちよつと……あんだ誰？」

少年は俺の質問を聞いていないのか、なにやらモジモジとした様子で、だけど真っ直ぐに俺のことを見ながら言った。

「実はですね、あなたには『転生』していただきたいと思いつて」

「……………はい？」

用件を言うより先に、言うことってのがいっぱいあるんじゃないのか。そう思いながらも、彼の言葉が俺に届いた瞬間、何か妙な温かさを感じた。

それは体の無い俺の隅々を駆け巡る、波紋のように広がっていく何か。それを感じ取ると、俺はある変化に気が付いた。

動いた。

無いはずの体が動いた気がして、俺は自分を見ようとした。

そう、形が無いはずだったのに、俺は自分自身を目で見ようとしたのだ。

「どういうことだ……これ？ 俺、どうなってるんだ？」

「今、あなたには転生するための準備が始まっています。もうすぐで転生が完了しますから」

「テンセイって一体なんだ？」

「転生が完了すれば自然と分かるかと思いますが」

少年は続けた。

「あなたには、これから『魔法少女リリカルなのは』の世界に誕生していただきます」

その言葉を聞くのと同時に、全身を駆け巡っていた異変が更に慌

しさを増した。

広がっていた波紋はやがて、命を感じさせる脈となり、肉体を描く輪郭となり、存在を示す色となって、俺を完成させていく。

「……………転生？ ……………リリカルなのは？」

「はい。また向こうの世界でご案内しますので、もう少しお待ちください」

少年の言葉を聞きながら、俺はどんどん完成していく自分の体に意識が繋がっていくのを感じ取った。

そして、最初に抱いていた気持ちを思い出していた。

悲しい運命なんてまっぴらごめんだ。

お前の考えた生き方なんて。

お前の作りだした道なんて。

お前の決めた運命だなんて。

「お前つて……………誰だ？」

次の瞬間、真っ黒だった世界は無数のヒビにまみれ、そして音も無く割れて砕けた。

目が覚めた。という表現は正確なのだろうか。

俺は、部屋の真ん中に立っていた。

フローリングの床から伝わる冷たさ。開け放たれたカーテンの向こうには青空。壁に掛けられているものは、黒い学ラン。

ここが誰の部屋なのか。そんな思いが一瞬だけ浮かんだが、それをすぐに忘れるようなことに気が付いた。

体がある。あの真っ黒な場所で徐々に出来上がっていた自分の体が、実在しているのだ。両手で顔や胸や腿を触ってみると、確かに温かさがあった。

しかし、何故か全裸だ。

「転生は無事に済んだようですね」

声のした方向に振り向くと、ベッドの上に腰掛ける人物がいた。その声も、姿も、あの真っ黒な場所で出会った彼そのものだった。だけど、彼の名前が分からない。

いや、というよりも何故少年がこの部屋に？

とりあえず俺は、股間を両手で隠した。

「あの、どうなったんの？」

「徐々に頭で認識し始めるはずですよ。間もなく事情を飲み込めると思います」

その言葉がきっかけだったのかは分からないが、何だか頭の中の更に奥の方から、じわりじわりと滲むように広がるものがやって来た。

俺は一体誰なのか。俺がこの世界にどうやって降り立ったのか。

俺の今いる世界がどういった場所なのか。

「ここは……リリカルなのはの世界？」

「あ、そうですね！ 良かったあ、ちゃんと転生出来てるう！」

『魔法少女リリカルなのは』と言えば、とらいあんぐるなんちゃらとか言うゲームのファンディスクが元となっている、脚本家都築真紀の代表作とも言えるテレビアニメ作品だ。

主人公は高町なのは。優しくて一途な女の子である彼女が魔法の力と出会うことから始まる、ハートフルでガチガチバトルもあってとにかく可愛い子がいっぱい出てくるアニメだろ。

俺は知っている。全十三話の第一期放送を皮切りに今でも続いているこのシリーズ作品は、様々なメディア展開を繰り返している奥深さがあることを。そして、多くの二次創作作品が生まれるほどたくさんの人に愛されていることを。通称『SS』と呼ばれる二次創作小説が数え切れないほどあるのも、このシリーズの人気を物語っている。

そんな、現実ではない世界の中に、今、俺はいる。

そして先程から聞いている言葉、『転生』。

ということとは？

「ま、まさか俺は……………転生オリ主と言うやつか！」

「はあい！ 理解していただけて嬉しいですよ！」

「やっぱり。さっきこいつが言っていたみたいに、時間が経つにつれて、自分の現状を理解出来た。」

「転生オリ主と言えば、二次創作作品において目にするこの出来る設定で、もはや“ジャンル”と言っても良いぐらいメジャーなもの。」

「オリ主というのはオリジナル主人公の略、だと思う。」

「よくあるパターンとしては、神様の手違いで死亡した現実の人間が、お詫びということで神様に好きな世界へ生まれ変わらせてもらう。そうしてアニメ世界に転生した人物が主人公となって物語を紡ぐから、転生オリ主と呼ばれるわけだ。」

「これらの設定はよくSSに使われているが、まさか自分がその転生オリ主になるとは。」

「いや、そんなことよりも思ったのは。」

「こんなことって本当にあるんだな」

「まだ信じられませんか？ ってか、服着ませんか？」

「いやあー、正直SSでしかこういうのって知らなかったからさ。」

「まさか俺の身にこんなことが起こるなんて……………あ、ってことは、あんたが神様か？ なあ、神様だろう？」

「いえいえ、僕が神様だなんてそんな」

「全くテメエ様の不手際で俺を殺すだなんてとんでもない話だよ」

「え、殺すって……………あの」

「でもま、俺は許しちゃうよ。うん……………だってさ、転生オリ主と神様ってきたらさ、アレしかないじゃん？ ましてやここはリリカルなのは世界。もうアレしかないじゃん！？ なっ！」

「うわあ……………絡みづらいなあ、このキャラ」

「正直に言って、俺は胸をときめかせていた。」

「だって転生オリ主と神様の邂逅と来たら、次の展開は既に読めて

いるのだから。

神様の不手際で俺は死に、お詫びとして新たなる命を授かった。

しかし、人の死をそんな簡単に償おうだなんて虫が良すぎる。失った命には、俺の人生があつたはず。生まれてから死ぬまでに積み重ねた歴史があつたはず。それをたかが新しい命一つで賄おうなんて、そんな話があつてたまるか。

そうだ。俺にはもっと多くを要求する権利がある。

俺がこの世界にやって来たということは、すなわち、それなりの生き方をしなければならぬ。

「神様」

「あの、だから僕は」

「俺に」

「はい？」

「俺に、チート能力を寄こせ」

「……………くるとは思っていました、本当にきた」
当然の要求だ。

ここはリリカルなのは世界だぞ。魔導師達が活躍する世界だぞ。そんな世界にやって来たからには、俺だって魔法が使いたい。

そして、俺が主人公となるに相応しいほどの力が欲しい。反則^{チート}と呼ばれるような、恐ろしいまでに圧倒的で高性能で都合の良い能力が、俺には必要だ。

主人公って言うのは、誰よりも優れていなくちゃ駄目なんだ。

「さあ、寄こすんだ」

「実はですね」

「まあ、魔導師ランクSSSってのは当たり前だよな。そんなもって俺の相棒となるデバイスは、やっぱり剣タイプってのがオーソドックスなのかな。それとは別に何かもう一種類あつてもいいけど、そっちは神様に任せるよ。センスいいの頼むぜー。あとバリアジャケツトって言ったら見た目が」

そこまで言つて気になつた。

見た目？ そうだ、俺自身の容姿って大事じゃないか？

すぐさま部屋の中を見渡して、俺は鏡を探した。姿見らしきものは見当たらないが、机の引き出しとかには手鏡くらいあるだろう。やっぱりオリ主と言ったら中性的な顔立ちがデフォルトだろう。整った目鼻口は当たり前、髪はさらさらストレートで、ワンポイントとして目立つような色だと良い。鏡が無くても体は見る事が出来るが、俺が思う限りではとりあえず太っていない体型。しかし、実は超人的な力を秘めていたりするものだ。

「あの……実はですね。ちよつと言いだすけど」

「なんだよ、早く言ってくれ。もしくは能力をくれ」

「本当に申し訳ないんですけどお」

あつた、鏡。

俺は一度深呼吸をしてから鏡を覗き込んだ。

すると、そこには。

「ふ、普通だなあ。ちよつと普通過ぎるっていうか、もろに日本人だな」

「ま、まあここも、なのはの世界での日本ですから」

「ちよつと目え細くないか？ それに髪も黒だし………ってか何でメガネなんだよ？」

「メガネは外してもいいから、服着ませんか？」

あれ、何で俺って全裸なんだっけ？

その時だった。

「ちよつと、起きてるの？」

部屋の外で声が出た。

誰の声だ？ 女の人？ しかし、この家には俺と神様以外に一体誰が？

「ひろしい？ 起きてるのかって訊いてるのよ？」

ひろしって誰だ？ いや、それよりも待て。

女の声が近づいてきているが、このままでは間違いなくこの部屋にたどり着くだろう。

誰なのかは分からずとも、俺の今の状況は人に見せられるものではない。だって全裸だぞ。赤の他人にこんな姿を見られたらまずいだろ。

ベッドに潜り込んで隠れるか。

しかし、そこで俺は立ち止まった。

「ちょ、ちよつとお！ どうしたんですかって、それより服！ 服！」

ベッドには神様がいるが、彼の容姿と言ったらよく見てみれば美少年。絵画に描かれる天使が抜け出てきたような、それこそ俺が憧れた中性的な顔立ちをしていて、しかも金髪碧眼。日本人離れしている。

そんな少年と共に裸でベッドインとか、そっちの方が変態的じゃないか。むしろ犯罪的だ。

「まずい！ どうすればいい!？」

「え！ だから服着れば良かったのに！」

「さつきから何騒いでるのよ、まったく！ 開けるわよ!？」

そしてドアが開かれた瞬間、俺の視界には中年の女性が映っていた。

時間にして約コンマ数秒と言ったところ。しかし、女性の硬直した姿がやたらと長く目に映っていたのは気のせいだろうか。俺の出来上がったばかりの心臓は、早くも止まりそうになっていた。

俺の全裸を見た彼女は短く悲鳴を上げた後、慌ててドアを閉めながら、「そういうのは一人の時にしなさいよっ!」と言って立ち去っていった。

全身に鳥肌が立ち、股間もきゅーっと縮まった。

それを見て一言。

「ちつちや……………」

そして俺は続けた。

「神様、これは一体」

「ぼ、僕はあなたにしか見えませんから、大丈夫です」

「あつそ……………じゃあ、あの人は？」

「お母さん、ですね。この世界における、あなたの」

「じゃあ、今夜は出会ったばかりのマイファミリーで家族会議かな。俺はパンツを探し出し、そつと穿いた。」

「どうしてそういうことは早く言ってくれないんだよ！」

「僕は言おうとしたんですよ？ で、でもひろしさんが」

「ひろしって呼ぶな！俺はもつとイカした名前がいいんだよ！」

部屋に掛けられていた学ランに着替え、俺は神様と一緒に家を出ていた。

家を出たと言っても、家出をしてきたという意味ではない。気まずい空気のままではあったが、母さんの用意した朝食をおいしく食べて、俺は学校に向かうため家を出たのだ。

俺以外の人には姿が見えないという神様を引き連れて、俺は晴れ空の下をイライラしながら歩いていく。

「俺を転生させるんだったら、もっと気の利いた境遇にしてくれなくちゃ駄目だろ！？」

激しい口調で責め立てると、神様は目を潤ませて鼻頭を赤くしながらも反論してきた。

「だ、だって！ 僕だっているいろいろ考えたんですよ！ ご飯の心配も要らない、社会人みたいに忙しさに時間を取られることもない、ただど親の躰や拘束にもそれほど縛られない、人生の中でも最も自由ではないかと思われる時期にあなたを転生させたいんです！ そう、十五歳に！」

「十五歳って言ったら受験生じゃねえかよ！ めちゃくちゃ忙しいよ！ 原作介入どころじゃねえよ！」

本当に気の利かない神様で困る。

俺が望んだ転生オリ主ってのは、両親は既にいなか離れて暮ら

しているかで、身を寄せる場所や安息の無い悲しい宿命を背負った男だ。しかも過去に、決して人には言えない秘密があったりして、それ故に全てを悟っていて、しかし、なのは達原作キャラと出会うことで大切な人を守るためという目標を見つけて。笑いかけたらポ、頭撫でたらポ。そんな素敵でダンディーでクールでギャグもやつちやってそんなでもって俺のために原作キャラがニコニコホロリで。

「あ、あの」

「何だよ！？ 今良いとこなんだよ！」

「僕、素敵だと思えますよ、ひろしって名前」

「フオローはいいんだよ！」

「確かご両親は、心の広い人に育ってほしいという想いを込めて」

「だからいいんだよ！ …………… それより、今って原作で言うところの辺なんだ？」

「何がです？」

「時代って言うか時期、時間って言うか…………… 要するに、原作はどこまで進んでるの？」

そこは肝心だ。とにかく、俺の身の回りに対する不満はこの際無視するとして、原作介入が出来るかどうかが大切なんだ。

俺が神様の答えを待っていると、彼は「えーっと」と言いながら視線を宙に泳がせた。

「確か、高町なのはは現在九歳で、私立聖祥大附属小学校の三年生です」

「じゃあ原作で言うと二期か二期ってわけだ。それにしてもなあ、なんで俺となのはを同級生にしないかなーこの神様は」

「予定では今日の夕方、なのはは塾に行く途中の公園でユーノと出会いますね」

「じゃあ一期か…………… って今日かよ！？」

なんだなんだ、この慌しさは。

転生オリ主の初原作介入っていうのは、タイミングが大事なんだよ。間が悪くてなのは達といつまでも出会えずに、気が付いたら放

送終了してましたじゃ意味ねーだろうが。

これから起きる事柄としては、シリーズ一期の第一話において要とも言える展開。なのはが初めてユーノに出会う場面。

何としてでも、ここに俺という存在をねじ込まなくてはならない。そして魔導師としての俺も初お披露目というわけだ。

「こうしちゃいられんな。さつさと公園に行つて張り込みだ」

「え、学校は行かないんですか？」

「アホか。おとなしく学校で受験勉強するオリ主なんて聞いたことねえよ。何事も早め早めが肝心だ。今のうちに公園と周辺地理を把握して、俺となのはの邂逅を絶妙のタイミングでクリアするんだ」

「でもひろしさん」

「ひろしってゆうーな。俺の名は……………そうだな、『さいじょういんせいば碎城院聖刃』
とでも名乗っておこうか」

「……………いいんですか、それで」

何故か顔を引き攣らせている神様。圧倒されているって感じだな。しかし、そんなものに構っている暇も無い。とにかくリリカルなのは一期の世界にやって来た以上、この物語の舞台となる海鳴市についてよく知っておかなくてはいけない。まずは一番肝心な、なのはとユーノの出会いの場所だ。

幸いなことに、市内に点在する地域マップを見つけることが出来た。海鳴市はかなりでかい市ではあるが、俺の家から公園までは歩いていけない距離でもないことが判明。その点だけに関しては、神様を褒めてやってもいいなと思う。

走り続けること二分ほど、息が上がってしまった。

なんだこの体。チート能力で空とか飛べるといいのにな。ま、そういうた能力のお披露目も後にとっておくか。

時間もたつぷりあるし、歩いていこう。

ただ歩くだけというのも退屈なので、俺は神様に言った。

「なあ、何で俺を転生させるって時に、俺の家族までも用意する必要があつたんだよ？」

「またその話ですか………まあ、一言で言えば、原作内にごく自然な形であなたを転生させるため、平凡な設定を用意したからです」
平凡な設定？ その言葉の意味が分からなくて、俺は首を傾げて神様の方に顔を向けた。

すると、神様は俺の顔を見て理解したのか、真顔で言ってきた。

「要するに、あなたには原作に影響が出ない程度の人物として、この世界に入り込んでいただきました」

「それっておかしくないか？ 俺、原作介入目指しちゃってるんだけど。神様の言い分だと、俺は原作に影響を与えちゃいけないみたいじゃん」

「スムーズなスタートを切るためですよ。あなたが原作介入をするにしても、出だしからぶっ飛んだ介入をしてしまうと、もはやそれは原作介入ではなく、オリジナルになってしまうからです。なるべく原作に沿った展開で、でも、あなたには介入していただく、と」

「なんかピンと来ないなあ。最初っから設定改変済みで始まるSSだってあるくらいだぞ？ 何でそんなに気を遣うんだよ？」

そこまで言うと、神様の顔が更に真剣さを増していることに気が付いた。その気迫に押された俺は、思わず歩みを止めてしまう。

そんな状態の俺を待っていたかのように、神様は更に一步、俺に近づいて言った。

「あなたにお願いがあるんです」

「な、何？」

「救ってほしいんです」

「は？」

「救ってほしいんです。この作品に待ち構えている、悲しい展開をあなたの手で助けてほしいんです」

それは、俺にそうしろと頼んでいるのか？

無論、原作介入をするからには、俺はなのはの物語を公式とは違う方向に持っていくつもりだ。

原作介入だぞ？ しかも俺が主人公。自分の望む展開にならない

でどうする。

そんなことを改めて言われても、俺は頷くさ。

いや、違う。頷くことしかできなかった。

そうすることしか出来なかったのは、神様の言うことが当たり前過ぎて言葉が出なかったからじゃない。

怖かった。神様の切羽詰まった顔が、俺に有無を言わせないくらい、余計な言葉を発すると言わんばかりの、それほどまでの気迫に満ちていたからだ。

一体なんだと言うのだろうか。神様の望みを俺が叶えるということが、俺の目的みたいに言われている。

これではまるで、神様のために俺が転生させられたみたいじゃないか。

いや、本当にそうだろうか。

俺は湧き起こる記憶の波を感じ取った。

そして思い出してきた。あの、真っ黒な世界で俺が抱いていた気持ち。

俺だって神様と同じで、悲しい結末を望んでなんかいない。

ハッピーエンドこそが至高。誰もが悲しまない終幕こそ、物語には相応しい。

お前の思い通りには、絶対させない。

お前？

「あ、ひろしさん。公園が見えてきました」

「ひろしじゃねーって。セイバと呼んでくれていいぞ」

辿り着いた公園は、緑が豊かで遊歩道があちこちに伸びている穏やかな場所だった。今はまだ陽が高い時間帯ということもあって、あちこちで見られる公園の利用者はお年寄りがほとんど。ストレッチをしたり、ベンチに腰掛けてお喋りをしていたり、公園内の池で釣りに興じる人もいる。

ふと思い出した。確かなのは達は、塾の帰りにこの公園の中で、近道をしようとしてユーノを見つけるんじゃないかってっけ。

更に、アニメの放送内容を振り返る限りでは、ユーノは既に小動物状態で横たわっているはず。

ならば、その場所をきつちりと正確に把握しておかないといけな

い。
俺は遊歩道から外れて、草を掻き分けながら傷ついたユーノを探した。

そうすること一時間以上。腹が減ってきて力も出なくなっていた時、ようやく俺の目の前に、希望の光が見えてきた。

「おお、見つけたぞ！」

草に身を隠しながら、俺は小さな声で神様に告げた。

「あそこにフレットモードのユーノがいるぞ」

「本当だ。うわぁ、結構傷だらけなんですね」

神様の言う通り、そして原作の通り、ユーノは体の至るところが傷ついていた。見ているだけでもなかなか痛々しい。

「どうしましょう?」

「どうするも何も、場所も把握出来たし、今はとりあえず無視だよ」

「え! あのまま放っておくんですか!？」

神様がそんなことを言うので、俺は小さくため息をつきながら言い返した。

「スムーズなスタートで介入するって言ったのはあんただぞ? それに、ユーノだって男の子なんだし、どうせ夕方には助けが来るんだ。ちよつとぐらい我慢させといても大丈夫だ」

「なんかシビアっすねえ……………」

俺は神様と共に、そつとその場から離れた。

少し離れたところまで行き、低くしていた姿勢を起こすと、体のあちこちに付いた葉を払い落とす。

ユーノの倒れている位置は確認できた。あとは時が来るのを待つだけだ。

その時に俺は、『魔法少女リリカルなのは』の物語に介入する転生者としての人生をスタートさせるわけだ。

待っている。必ずや原作の悲しい結末を変えてみせる。

砕城院聖刃の名にかけて。

「ちよつと君い」

「え？」

突然声を掛けられて、視線をくるりと変えると、そこには正義を守る日本のおまわりさんが立っていた。

「学生だろ、君。こんなところで何しているんだ？」

「あ、いや、俺は別に怪しくなんてないぞ」

「もうとつくに授業が始まっている時間だろう？ それなのにこん

なところで堂々とサボりかい？ 君、名前は？」

「さ、砕城院！ 砕城院聖刃だ！」

「……本当の名前は？」

「山田ひろしだよ！」

ちくしょう、本当に原作介入してやるんだから。

俺は、背後から注がれる神様の刺々しい視線を浴びながら、固く誓った。

See you next time .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6798y/>

転生NEXT

2011年11月20日18時38分発行